

これからの学生教育について

寺平 良治*1§ 岡野こずえ*2 市野 直浩*1 大橋 鈺二*1
 澤田 浩秀*3 谷口 薫*4 小林 隆志*5 藤原 直士*6

〔Key Words〕 臨床検査技師教育、PBL チュートリアル教育、考える力、生活指導、動機づけ

はじめに

(寺平 良治、岡野こずえ)

日本臨床検査学教育協議会が発足して半世紀を越え、教育施設の四年制大学化が進んできている。一方、進歩と発展が著しい医療現場からは「医療の変化に対応できる教育へ」と、教育の変革を求める声が年々激しさを増してきており、臨床検査教育は転換期にあるとも考えられる。

こうした背景から、第6回日本臨床検査学教育学会の教員研修会では、「これからの学生教育について」と題したシンポジウムが企画された(表1)。大学院大学から学部、短期大学、専修学校など、それぞれの立場で教育に直接携わっている現場教員にシンポジストとしてご発表頂き、参加者も交えて議論した¹⁾。しかし、時間が限られていたことと内容が多様であったため、当研修会では一定の方向性をまとめ上げることはできなかった。

そこで今回、本誌をお借りして、各シンポジストの「将来あるべき臨床検査技師教育」に対する熱い思いを主張していただくこととした。シンポ

ジウムの際には詳細に語られた内容も、本稿ではかなり凝縮されて書かれているが、それらを参考にされて、臨床現場と教育現場の双方で「これからの臨床検査技師教育について」のさらなる議論が深まっていくことを願っている。

表1 教育研修シンポジウムの内容

| | |
|-----------------------|------------|
| 平成23年8月18日(木) | 場所：新潟大学 |
| 日本臨床検査学教育協議会 教員研修 | |
| シンポジウム「これからの学生教育について」 | |
| ・司会 | |
| 寺平良治 | (藤田保健衛生大学) |
| 岡野こずえ | (山口大学) |
| ・シンポジスト | |
| 1. 市野直浩 | (藤田保健衛生大学) |
| 大橋鈺二 | (〃) |
| 2. 澤田浩秀 | (神戸常盤大学) |
| 3. 谷口 薫 | (山陽女子短期大学) |
| 4. 小林隆志 | (東洋公衆衛生学院) |
| 5. 藤原直士 | (新潟大学) |
| 岩淵三哉 | (〃) |

*1 藤田保健衛生大学医療科学部臨床検査学科 § rtera@fujita-hu.ac.jp

*2 山口大学医学部保健学科検査技術科学専攻、*3 神戸常盤大学保健科学部医療検査学科、

*4 山陽女子短期大学臨床検査学科、*5 東洋公衆衛生学院臨床検査技術学科、

*6 新潟大学医学部保健学科検査技術科学専攻

I. 「望まれる臨床検査技師」を育成するために (市野 直浩、大橋 鋳二)

我々は本当の意味での「臨床で活躍する検査技師」を育成する教育が、今後の臨床検査技師教育の中で重要であると考えている。その答えのひとつとして「病棟で活躍できる臨床検査技師を育成する」ということがあるのではないかと思う。それを実現するためには、現在の系列科目間の「縦の繋がりのカリキュラム」に加え、高学年次に「横の繋がりのカリキュラム」、具体的には臨床科別・臓器別のカリキュラムを導入する必要があると考えている。さらに、そのカリキュラムの教授法として従来型の講義ではなく、PBL (Problem Based Learning) チュートリアルによる教育が望ましいのではないかと考える。PBL は既に多くの医学部教育に取り入れられており、その教育的効果はコミュニケーション能力、チーム力、問題発見・解決能力などの向上にもつながり(図1)、そ

れらは現在、そして今後も臨床検査技師に求められる能力である。

臨床科別・臓器別のカリキュラムの導入、さらにPBLの導入となると大幅なカリキュラムの変更が必要になると同時に、教員のさらなる努力も必要になって来よう。それらを実現するには高い壁を越えなくてはならないが、その壁の向こうには「これからの臨床検査技師教育」があると確信している。

II. 四年制大学における学生教育 (澤田 浩秀)

1. 基礎専門科目および臨床病態学の充実

解剖学、生理学、生化学といった基礎専門科目は、臨床検査を学ぶための基礎となる科目であり、今後の臨床検査の発展を考える上でも、履修時間を十分確保すべきと考える。また、これら基礎専門科目は臨床病態学の基礎となる科目である。臨床病態学は、疾患と臨床検査との関係はもちろん、

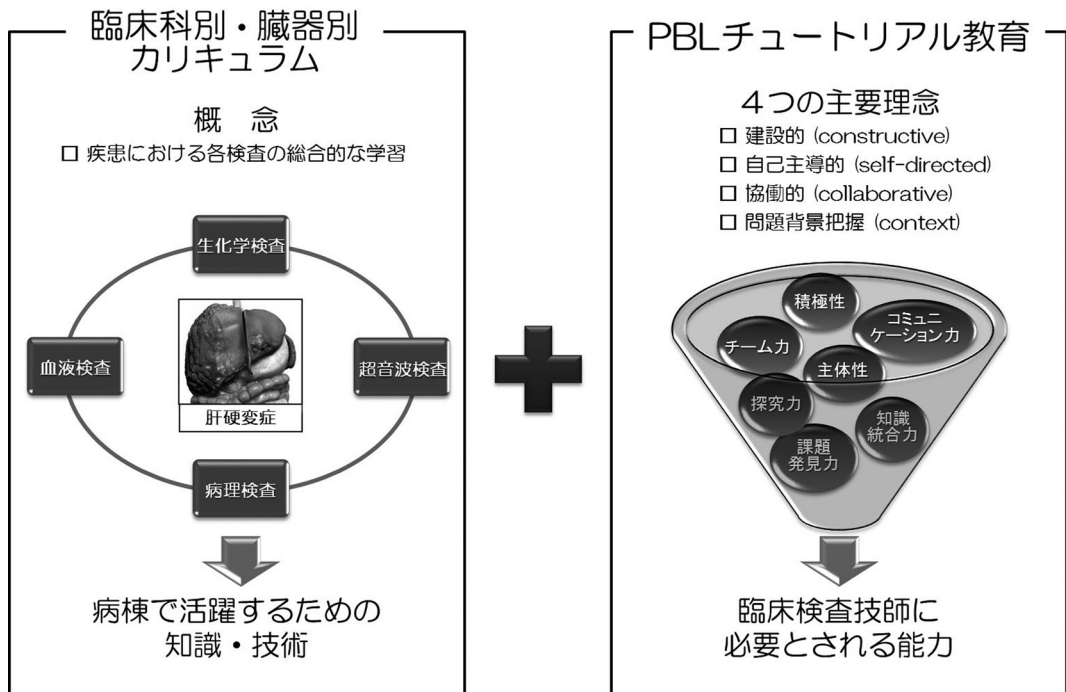


図1 臨床で活躍する検査技師の育成

患者さんに対する検査内容の説明、臨床検査技師による新たな医療分野の参入にとって重要な役割を果たす。

2. 卒業研究の充実

臨床検査技師養成大学の多くは卒業研究の期間が短縮化されているが、研究期間は充実させるべきである。卒業研究を充実させるためには、英文文献購読を十分行う必要がある。英文文献を苦痛なく、興味を持って読むことができれば、研究への関心が深くなる。臨床現場においても研究を行う機会は多いはずである。

3. 国際交流化

国際交流が盛んになり、受診する外国人患者さんも増える。また、海外で臨床検査技師として活躍することも期待できる。

4. 新たな検査の開発、研究者として活躍する臨床検査技師

臨床検査の知識は研究を行うためにも十分に立つ。臨床検査技師の免許を持った研究者として活躍する人が増えることを期待したい。

5. まずは国家試験合格率を向上

国家試験に合格しなければ、臨床検査技師としての第一歩を踏み出すことができない。

6. 各施設、各学科で教育方針について十分な協議を

各施設の教育理念、教育目標に基づき、施設または学科全体で十分な協議を行い、教育方針をつくっていかねば、全員が同じ目標や目的を達することはできない。

III. 短期大学の使命

(谷口 薫)

医学の日進月歩の時代、学生の学ぶ情報量が格段に増してきている中で、短期大学では四年制大学で学ぶ「知識と技術」を、3年間の限られた時間内に如何に習得させるかに掛っている。臨床の現場で何を要求されているかを指導することにより、実際の臨床現場で起きうる「答えのない課題」に一定の答えを導き出せるかという「考える力」に重点を置いている。短期大学入学者の目的

は明確化しており、国家資格修得・希望する病院検査室への就職とはっきりしている。学生の知識、思考力、想像力等の知的能力における入学時と卒業時の学力差、向上度が短期評価であり、卒業後に取得した認定資格や修士・博士号の修得、役職への就任や学会発表・論文投稿等が長期評価である。今必要なことは、情報・知識をどうすればよいか、即ち情報量も多い中で学び取った情報を如何に編集するかという「情報編集力」、多彩な知識を実践的に活用できる「知識の活用能力」の教育である。修得した知識の羅列ではなく、情報編集力や知識の活用能力を生かして、教科書通りではない「答えのない課題」に、自分で一定の解を導き出せる教育をしていきたい。

IV. 本学での学生指導の取り組み

(小林 隆志)

近年、少子化による18歳人口減少のため、入学応募者数の減少が顕著になり、学生の学力や生活習慣などが変化してきている。

本校へ入学してくる学生は、低得点者が増加する傾向にある。成績分布をみると、正規分布から高得点者と低得点者の二極化への傾向が見られる。

特に低得点者は、講義以外自宅等で勉強する習慣のない者がおり、講義終了後に学内に残らせ勉強する時間と環境を与えている。しかし、どのように勉強したらよいか分からない者もおり、対応に苦慮している。

ゆとり教育の影響か勉強する習慣の身に付いていない学生が今後も入学してくることが予想される。また、安易な気持ちで入学し「挨拶もできない」「コミュニケーションがとれない」「やる気がない」「言うことを聞かない」といった問題を抱えた学生が増えることも予想される。

これらの学生の問題の本質を的確に掴み、その学生にあった指導を行いモチベーションを上げさせ能力を引き出すことが重要であると考えている。

これから教員は、専門科目の教科指導のみならず生活指導などの指導力の向上が必要であると考えている。

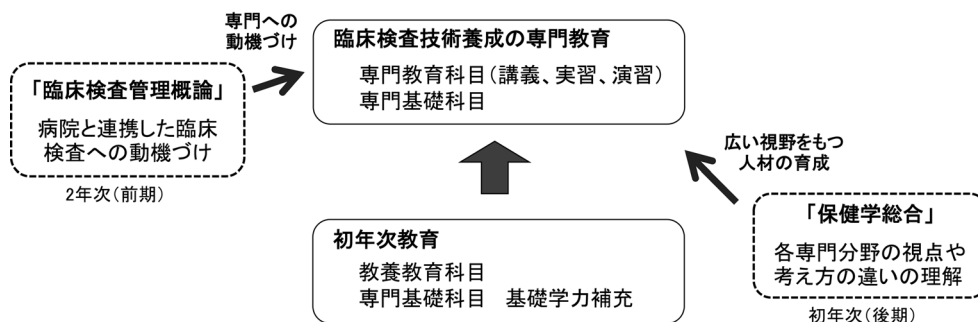


図2 臨床検査への動機づけと広い視野を持つ人材育成のための授業科目の位置づけ

V. 臨床検査技師養成の初期教育

～動機づけと人材育成～

(藤原 直士)

臨床検査技術教育の要件は資格取得にあるが、教養教育から専門教育への移行期に臨床検査への理解が乏しいまま高学年次を迎えて進路決定に迷う学生もおり、早い段階での臨床検査への動機づけが必要となっている。

そこで、本専攻では大学病院検査部門の協力を得て、専門教育への導入時期(2年次前期)に、講義と病院見学を通して臨床検査の役割と意義や実際の業務について学ぶ「臨床検査管理概論」を開講した。病院臨床検査部門の責任者も講師として参画し、病院見学では現場の業務を検査技師が学生に直接説明している。履修学生の多くが「臨床検査を体感し、自分の将来をイメージできた」という感想を持ち、臨床検査への理解と動機づけに

有効と考えられる。

一方、大学教育では広い視野を持って活躍できる人材の育成も重要な課題であり、平成23年度から医系、看護系、放射線技術科系教員との連携による「保健学総合」が初年次生向けに開講された。この授業では、各専門分野の視点や考え方の違いを理解し、協力して課題探求と問題解決にあたる能力の育成を図っている(図2)。

学士である臨床検査技師の養成には、臨床検査への動機づけと広い視野を持つ人材育成の両方が必要であり、それらに応じた初期教育の実施が重要と思われる。

文 献

- 1) 市野直浩, 大橋敏二, 澤田浩秀, 谷口 薫, 小林隆志, 藤原直士, 岩渕三哉. 教員研修2部. 第6回日本臨床検査学教育学会学術大会抄録集, 東京: 日本臨床検査学教育協議会事務局 2011; 33-7.